

B 服従 Unterordnung

各試験レベルにおける課題の概要

課題	IGP1	IGP2	IGP3
ノーリード脚側行進	15 点	15 点	15 点
常歩行進中の座れ	10 点 BH style OK	10 点	10 点
行進中の伏せと招呼	10 点 常歩+招呼	10 点 常歩+招呼	10 点 速歩+招呼
行進中の立止（招呼）	-----	10 点 常歩	10 点 速歩+招呼
ダンベル持来	15 点 650g	10 点 1k	10 点 2k
1m 障害	15 点 2回ジャンプ	15 点 往復+持来	15 点 往復+持来
斜壁	15 点 1回ジャンプ	10 点 1回ジャンプ	10 点 往復+持来
前進と伏せ	10 点	10 点	10 点
状況下での休止	10 点 10m	10 点 20m	10 点 30m
合計	100 点	100 点	100 点

全般

命令

犬の名前を、「呼び寄せ」の命令の代わりに使用することができます。犬の名前と命令を組み合わせて使用する場合、それは「ダブルコマンド」と見なされます。

命令に対する犬の反応

犬は、ハンドラーの命令に対して、喜んで、自信を示し、直ちに動作を実行しなければなりません。恐怖やストレスに起因する行動は、課題の評価を下げる原因となります。

追加の命令

追加命令 1 回（2 回目）－1.5 点

追加命令 2 回（3 回目）－2.5 点

犬が 3 回目の命令後も動作を実行しない場合、その課題は評価なし（0 点）となります。

犬が間違った動作を行った場合（例：座る動作なのに立つまたは伏せる、伏せの動作なのに座るまたは立つなど）、その課題は 50% の減点となります。

犬が命令なしで動作を行った場合、2 点の減点となります。

持来に関する減点（1m 障害持来、板壁持来を含む）

ハンドラーの命令前に、犬が勝手に課題を開始した場合、最大で 2 点の減点となります。

申告

服従の開始前に、2人のハンドラーは犬と共に基本姿勢で審査員の前に立ち、自分の名前、犬の名前、そして受験する試験レベルを伝えます。申告は、FCI-IGP1はリードをつけた状態で行い、FCI-IGP2およびFCI-IGP3はリードなしで行います。

課題の開始と終了

脚側行進を行うハンドラーと犬は、もう一人のハンドラーが「状況下での休止」の課題を行うために、基本姿勢をとる際までに、基本姿勢をとらなければなりません。審査は、2頭の犬がそれぞれ最初に実施する課題の基本姿勢をとった時点で開始されます。課題の開始は審査員が指示を出します。それ以外の動作（方向転換、停止、歩度の変更、停止後の再出発など）は審査員の指示なしで実行します。

約3秒の間が必要な場面ではそれを守る必要があります。

- 例：
- ・正面停座後→約3秒→終了基本姿勢
 - ・ダンベル持来→正面停座後→約3秒→ダンベルの受け取り
 - ・終了基本姿勢→約3秒→犬を褒める
 - ・新しい基本姿勢→約3秒→課題開始

ハンドラーが課題を忘れた場合、審査員は忘れた課題を実行するよう促しますが、この場合、減点はありません。ただし、ハンドラー（犬）が課題の一部を省略した場合には評価に影響を及ぼします。

基本姿勢／正面停座から終了基本姿勢

基本姿勢とは、犬がハンドラーの左側で座る位置を指します。すべての課題は基本姿勢から始まり、基本姿勢で終わります。基本姿勢は、各課題のために一回だけ、前方への動きを止めて行います（バックをしながら行ってはいけないという意味です）。基本姿勢において、犬はまっすぐに座り、指導手に注意を向け、肩甲骨の位置がハンドラーの膝の側面と一致している必要があります。指導手は足を広げて立つことは許されず、両腕はリラックスした状態で体の側面に沿っている必要があります。（不自然または極端な位置や動きを取らない限り、また犬に意図的に触れるような行為がなければ、腕（手）は体に密着させる必要はありません）

正面停座から終了基本姿勢に移行する際、ハンドラーの後ろを小回りしてくると回る、または頭を軸に体を（上から見て）180度左反転する。どちらの方法で行ってもよい。

犬が正面停座から終了基本姿勢に移行する際に追加命令があった場合、以下の減点が適用されます：

- 正面停座から終了基本姿勢への追加命令1回（2回目の命令）－1.5点
- 正面停座から終了基本姿勢への追加命令2回（3回目の命令）－2.5点

3回目の命令後も犬が終了基本姿勢に移動しない場合、その課題の全体は「M／不可」と評価されます。

この場合は課題終了場面の特別ルールにより、0点とはなりません。

助走（脚側行進）

基本姿勢から助走（脚側行進）が行われる課題は以下の通りです：

「行進中の座れ」「行進中の伏せと招呼」「行進中の立止」「前進と伏せ」
助走（脚側行進）の距離は最低 10 歩、最大 15 歩。その 10～15 歩の間に命令を与えます。

待っている犬のもとに戻る／犬の呼び寄せ

待っている犬のもとに戻って、犬の右側に立つときは「犬の正面から直接」または「犬の左側から後ろを回って」のどちらでもよい。

犬を呼び寄せる際に、「呼び寄せの命令」の代わりに「犬の名前」を使用することができる。犬の名前に加えて何らかの命令を行った場合はダブルコマンドと見なされる。

褒める行為

褒める行為は、各課題の終了後に基本姿勢でのみ行うことが許可されています。褒める行為があった場合、次の課題のための新しい基本姿勢を約 3 秒示した後に課題を開始します。

褒める行為の例外

FCI-IGP1 においては、各課題の後、犬をリラックスさせて褒めることができます（最大約 5 秒間）。この褒めることとリラックスのときは、犬が基本姿勢の位置から離れることが許されます。その後は、新たな基本姿勢をとる必要があります。そして約 3 秒間後に次の課題を開始します。

時間間隔（間）

以下の場面では、約 3 秒の間隔を守る必要があります：

- 例：
- ・犬を褒める→約 3 秒→課題の開始
 - ・正面停座→約 3 秒→終了基本姿勢への移行
 - ・正面停座後→約 3 秒→ダンベルの受け取り
 - ・ダンベルの受け取り後→約 3 秒→終了基本姿勢への移行
 - ・課題の終了（終了基本姿勢）→約 3 秒→犬を褒める
 - ・基本姿勢→約 3 秒→課題の実行

犬が間違った姿勢を行ってしまった場合

課題（座れ、伏せ、立止）において、間違った姿勢を行った場合、その課題全体の評価は 50%減点となります。その間違った姿勢意外にも問題があった場合、別途減点されます。

持来

ダンベルを投げる際、片足を一步前に踏み出すことができます。その場合、足を元の位置に戻した後、約 3 秒の間隔を空ける必要があります。

左利きのハンドラーは、審査員が合意すれば、犬に「座れ」の命令を与え、横に一步移動してダンベルを投げるすることができます。投げたあとは、ハンドラーは犬の横に戻り、約 3 秒の間隔を空けてから課題を続行します。

犬が 3 回目の命令後もダンベルを放さない場合、不服従により失格となります。

持来の課題では、試験主催者が用意したダンベルのみ使用可能です。

すべての参加者は同じダンベルを使用しなければなりません。

ダンベルの仕様に関する規定

- ・中央のバーは木製でなければなりません。
- ・重量は規定に従う必要があります。
- ・中央のバーと地面との間に最低 4cm の間隔が必要です。

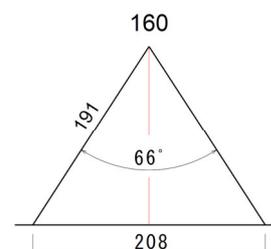
ダンベルの重量

	平地持来	1m 障害持来	板壁持来
FCI-IGP 1	650g	持来なし	持来なし
FCI-IGP 2	1kg	650g	持来なし
FCI-IGP 3	2kg	650g	650g

障害

障害の寸法は、すべての試験レベルで共通です。高

さ 100cm、幅 150cm。



板壁

- ・板壁は、上部が接続された 2 枚の壁で構成されている。寸法：幅 150cm 長さ 191cm
- ・設置する際、底辺を広げて調整し、垂直の高さ（地面から頂点まで）が 160cm となるように設定します。その場合、角度は 60 度となる。
- ・板壁の全面には滑り止めの加工が施されている必要があります。
- ・板壁の上半分には、3 本の足掛けバー（約 24mm×48mm）が設置されています。
- ・すべての犬は同じ板壁で登攀を行わなければなりません。

その他の注意事項

審査員は、試験開始前に用具が揃っているか、そして試験規定に適合しているかを確認しなければなりません。

各課題の審査中、犬の行動は基本姿勢の段階から課題の終了まで、慎重に観察される必要があります。

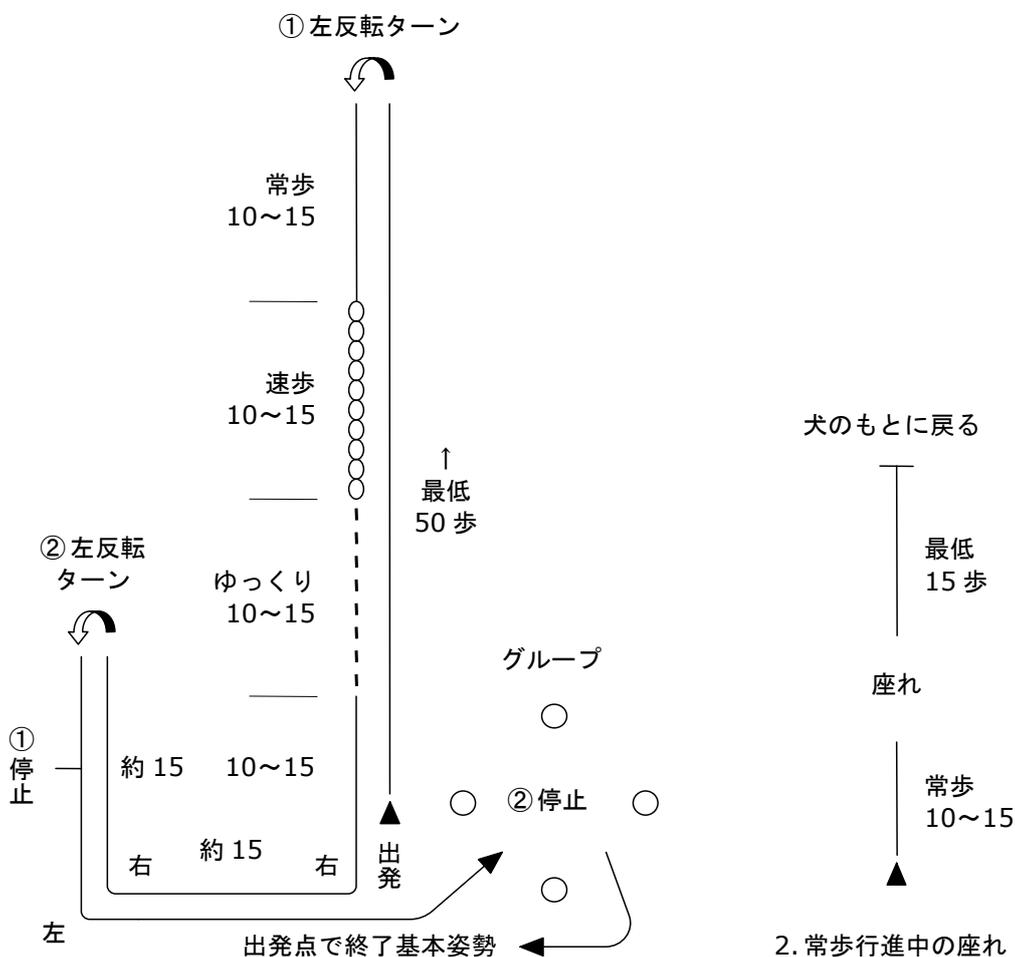
評価における重要要素と二次的要素

課題の評価に関する基本原則：

- ・評価の精度を高めるため、一部の課題はいくつかの要素に分けて個別に評価されます。
- ・評価の際には、課題の重要要素（プライマリー要素）と二次的要素（セカンダリー要素）を区別する必要があります。重要要素は、課題の本質を反映するため、より高い比重で評価されます。

評価における重要要素と二次的要素の詳細については、各課題の説明に記載されています。

FCI-IGP 服従課題の概要



『立止』の課題は、伏せと招呼の終了地点から出発地点に向かって行います。

服従 各課題の説明

脚側行進（ノーリード）

基本姿勢から、ハンドラーによる一回の「Fuß フス」の命令に従い、犬は「注意して」「喜んで」「集中して」歩き出す。犬は常にハンドラーの左側で「犬の肩甲骨とハンドラーの膝が並列する」位置を維持しながら行進しなければならない。

スタート後の直線を行進中、銃声に対する無関心を確認するために、最低 15 歩離れた距離から 2 回の銃声テスト（6mm 口径）が実施される。（1 回目と 2 回目の間隔は 5 秒）

ハンドラーは、左反転ターンを必ずその場で 180 度左回転して実行する（U の字で歩いてはいけない）。犬は左反転中のハンドラーの周囲を右小回りしてくるっと回るか、またはハンドラーとの位置関係を変えずにハンドラーと同じ動作で頭を軸にして体を 180 度左反転する。

その後、

「常歩 10～15 歩」⇒「速歩 10～15 歩」⇒「ゆっくり 10～15 歩」⇒「常歩 10～15 歩」
⇒「右折」⇒「常歩 10～15 歩」⇒「右折」⇒「約 15 歩」⇒「左反転ターン」⇒「停止」
⇒「左折」⇒「グループ」⇒「グループ内の人に近いところで停止」⇒「終了基本姿勢」の
順で行う。

速歩とゆっくり歩くときのスピードは常歩とハッキリと違うことを示さなければならない。
歩度の切り替えは曖昧さを示すことなくダイレクトに行う。

2 回目の左反転ターンの後、ハンドラーは停止する。このとき犬は命令なしで直ちに座らな
なければならない。

その後、最低 4 人の動いている人のグループへと向かう。

ハンドラーと犬は、グループの 1 人を軸にして右回り、他の 1 人を軸にして左回りを実行
する（たとえば上から見て 8 の字）。そして最低 1 回、グループ内の人に近いところで停止
する。犬は命令なしで直ちに座る。このとき審査員はグループ内行進の繰り返しをハンド
ラーに求めることができる。

審査員の指示で、ハンドラーと犬はグループを離れ、終了基本姿勢をとります。犬を褒め
ることができるのは、グループを離れた後の終了基本姿勢後のみである。その後、次の課
題の開始基本姿勢をとります。

また、次の課題のために移動が必要なときも脚側行進を実行する。

評価基準：

重要要素：

犬の正しい位置、犬のポジティブな表現（意欲的で、のびのびとしており、注意深く、集
中していること）。

二次的要素：

課題の開始および終了時における基本姿勢の実施。

誤りの例：前に出る、横にずれる、遅れる、動作が遅いまたはためらうような座り方、追
加の命令、身体的な補助、基本姿勢での誤り、注意散漫、作業意欲やモチベーションの欠
如、自信のなさ、また犬の極端にこわばったまたは異常な歩き方など。

行進中の座れ (Sitzen aus der Bewegung)

第 1 パート：開始基本姿勢、助走（行進）、命令による座れの実行 → 配点の 50%

第 2 パート：ハンドラーが犬から離れて戻るまで、および終了基本姿勢 → 配点の 50%

ハンドラーは 10～15 歩の助走中、「Sitz（座れ）」の命令を与える。犬はハンドラーの動き
や視線に影響されることなく、直ちにまっすぐ座らなければならない。

犬は、自信を持って、ためらうことなく実行し、その後は落ち着いて注意を向けながら座ったまま待機しなければなりません。

ハンドラーは最低 15 歩離れて立ち止まり、犬の方を向く。審査員の指示で、ハンドラーは常歩で犬のもとへ戻り、基本姿勢に入ります。その後、犬を短く褒めることが許されています。

※FCI-IGP1 の特別規定：行進中 10～15 歩の間で、ハンドラーは停止する。犬は命令なしで直ちにまっすぐ座る。その後、ハンドラーは「座れ」の命令を与えてから離れることができます。

評価基準：

重要要素：

「座れ」の命令に対してためらいのない素早い実行、および犬がその命令をどのように受け取っているかの様子。

二次的要素：

課題の開始および終了時の基本姿勢、助走動作、ハンドラーが離れる間の犬の集中状態。

誤りの例：

ためらいがちな座り方、自信の欠如、ぎこちない動き、命令に対する不安定な反応、落ち着きのなさや注意散漫な座り方。これらの誤りは、他の減点対象とは別に追加で評価を下げる要因となります。犬が立っていたり伏せていた場合は、その課題の評価は最大でも全体の 50%までに制限されます

行進中の伏せと招呼 (Ablegen in Verbindung mit Herankommen)

第 1 パート：開始基本姿勢、助走（行進）、命令による伏せの実行 → 配点の 50%

第 2 パート：ハンドラーが犬から離る、招呼、正面停座、終了基本姿勢 → 配点の 50%

助走の距離は 10～15 歩とし、FCI-IGP1 および IGP2 では常歩で行い、IGP3 では常歩の後 10～15 歩の速歩に切り替えます。

「Platz（伏せ）」の命令に対して、犬はハンドラーの動きや視線に影響されることなく、進行方向に対してまっすぐに、ただちに伏せなければならない。

FCI-IGP1 および IGP2 では、ハンドラーは常歩のまま最低 30 歩進んで立ち止まり、犬の方を向く。

FCI-IGP3 では、ハンドラーは速歩のまま最低 30 歩進み、犬の方を向いて立ち止まります。

犬は呼び寄せられるまで、落ち着いて注意を向けながら伏せたままで待機してなければならない。

審査員の指示により、犬を「Hier (来い)」または犬の名前で呼び寄せる。犬は喜んで、まっすぐ確実にハンドラーの元へ走り寄り、ハンドラーの前でまっすぐに近づいて座らなければならない。

次の命令で、犬は終了基本姿勢に移動しなければならない。3秒の終了基本姿勢の後に犬を短く褒めることが許されている。

※FCI-IGP1の特別規定：行進中10～15歩の間で、ハンドラーは停止する。犬は命令なしで直ちにまっすぐ座る。その後、ハンドラーは「伏せ」の命令を与えてから、離れることができます。

評価基準：

重要要素：

「伏せ」の実行、その命令に対して犬がどのように反応するか、ためらいのない素早い伏せの実行、ハンドラーへの駆け寄り、正面停座。

二次的要素：

課題の開始および終了時の基本姿勢、助走動作、ハンドラーが離れる間の犬の集中状態。

誤りの例：

伏せ動作におけるためらいや遅れ、不明瞭な実行、自信のなさ、ぎこちない動き、命令に対する不安定な反応、落ち着きのないまたは注意を欠いた伏せ、ハンドラーに向かう際の目的意識の欠如など。これらの誤りは、他の減点対象とは別に追加で評価を下げる要因となる。

犬が座っていたり立っていた場合、その課題の評価は最大でも全体の50%までに制限される。

呼び寄せに対して2回目の追加命令でも犬が来なかった場合、その課題は「不可」と評価され、得点は0点となる。この場合、犬を迎えに行き、試験は次の課題へと進む。

行進中の立止と招呼 (Steh aus der Bewegung) FCI-IGP3

第1パート：開始基本姿勢、助走(速歩)、命令による立止の命令の実行 → 配点の50%

第2パート：ハンドラーが犬から離れる、招呼、正面停座、終了基本姿勢 → 配点の50%

ハンドラーは10～15歩の速歩中に「Steh (立て)」の命令を与える。犬はハンドラーの動きや視線に影響されることなく、進行方向に対してまっすぐに、ただちに立ち止まらなければならない。

ハンドラーはそのまま最低30歩速歩で進んで立ち止まり、犬の方を向く。犬は呼び寄せられるまで、落ち着いて注意を向けながら立ったままで待機していなければならない。

審査員の指示により、犬を「Hier (来い)」または犬の名前で呼び寄せる。犬は喜んで、まっすぐ確実にハンドラーの元へ走り寄り、ハンドラーの前でまっすぐに近づいて座らな

ればならない。

次の命令で、犬は終了基本姿勢に移動しなければならない。3秒の終了基本姿勢の後に犬を短く褒めることが許されている。

評価基準：

重要要素：

「立て」の実行、その命令に対して犬がどのように反応するか、ハンドラーへの駆け寄り、正面停座。

二次的要素：

課題の開始および終了時の基本姿勢、助走動作、ハンドラーが離れる間の犬の集中状態。

誤りの例：

ためらいや不明瞭な立ち止まり、自信の欠如、ぎこちない動き、命令に対する不安定な反応、落ち着きのないまたは注意を欠いた立ち姿勢、FCI-IGP3において目的意識のない呼び寄せなど。これらの誤りは、他の減点対象とは別に追加で評価を下げる要因となる。

犬が座っていたり伏せていた場合、その課題の評価は最大でも全体の50%までに制限される。

FCI-IGP3において、呼び寄せに対して2回目の追加命令でも犬が来なかった場合、その課題は「不可」と評価され、得点は0点となる。この場合、犬を迎えに行き、試験は次の課題へと進む。

ダンベル持来

FCI-IGP1 : 650g

FCI-IGP2 : 1kg

FCI-IGP3 : 2kg

課題の開始位置から10mの地点を中心として4m×4mの正方形のエリアがマーキングされている。ハンドラーは基本姿勢から、ダンベルをこの正方形のエリアの中に投げる。ダンベルがマーキングされたエリア外に着地した場合は、助手（たとえば試験監督）が審査員の指示により、ダンベルをエリア中央に置き直す（ダンベルは横向き／ハンドラーから見て）。置く前にダンベルを上を短時間持ち上げて（ハンドラーと犬に）見せる。置いた後は作業エリアからすぐに退く。助手がエリア外のダンベルを置き直す際にハンドラーは犬に「座れ」を一度命じることができる。

審査員の指示で「Bring（持ってこい）」の命令を与える。命令を受けた犬は、直ちにダンベルに向かって走り、すぐに啜ってまっすぐハンドラーのもとへ戻らなければならない。この際、目的意識があり意欲的な往復動作が求められる。正面停座および持来の途中も、ダンベルを静かにしっかりと啜え続ける必要がある。

正面停座後、約3秒の間において、ハンドラーは「Aus（放せ）」の命令でダンベルを受け

取る。正面停座では、プレゼンテーション（ダンベル持ってきたよ！という犬の差し出す態度）が求められる。ダンベルを受け取って約 3 秒後、次の「Fuß（アトエ）」の命令で犬を終了基本姿勢に導く。ハンドラーはダンベルを右手に持ち、腕を下にまっすぐ下ろした状態で保持すること。課題終了後、ダンベルはハンドラーがスタンドに戻す。

評価基準：

重要要素：

持来の実行、ダンベルに向かう動作および戻る動作の一貫した意欲的な様子、ハンドラーの前での密着した正面停座、自信をもって行うプレゼンテーション、および快くダンベルをハンドラーに渡す態度。

二次的要素：

課題の開始および終了時の基本姿勢の実施。

誤りの例：

意欲の欠如、目的意識のない往復、萎縮した動作、自信を欠いた行動、くわえ上げのミス、ダンベルを落とす、遊ぶ／チューイング、ダンベルがハンドラーに当たる、プレゼンテーションのミス、またハンドラーによるあらゆる補助行為（例：足を開くなど）。

障害および板壁の開始位置

開始位置から障害または板壁までの距離は最低 4m でなければならず、その位置はマーキングされている。しかし、ハンドラーは 4m 以上の距離を選択することも可能である。

FCI-IGP2 および FCI-IGP3 1m 障害とダンベル持来

障害の寸法：高さ 100cm、幅 150cm。

この課題では、ダンベル持来が 5 点、各ジャンプ（往復）がそれぞれ 5 点、計 15 点で評価される。

障害の向こう側 8m の地点を中心として幅 2m×長さ 4m の長方形のエリアがマーキングされている。ハンドラーは障害から最低 4m 離れた位置で基本姿勢をとり、ダンベルをこの長方形エリアの中に投げる。ダンベルがマーキングされたエリア外に着地した場合は、助手（たとえば試験監督）が審査員の指示により、ダンベルをエリア中央に置き直す（ダンベルは横向き／ハンドラーから見て）。置く前にダンベルを上を短時間持ち上げて（ハンドラーと犬に）見せる。置いた後は作業エリアからすぐに退く。助手がエリア外のダンベルを置き直す際にハンドラーは犬に「座れ」を一度命じることができる。

犬は、ハンドラーの影響を受けることなく落ち着いて座っていなければならない。「Hopp（跳べ）」の命令で、犬は障害を跳び越える。そのジャンプ中に「Bring（持ってこい）」の命令を与える。犬は直ちにダンベルへ向かい、すぐに啜えて、往路ジャンプを行いハンドラーの元へ戻らなければならない。この課題全体を通して、犬は意欲的かつ力強いジャンプを見せ、障害に触れることなく持来を完了させなければならない。正面停座およびダンベルの運搬中は、ダンベルを静かに保持し続けること。正面停座後、約 3 秒の間において、

ハンドラーは「Aus（放せ）」の命令でダンベルを受け取る。正面停座では、プレゼンテーション（ダンベル持ってきたよ！という犬の差し出す態度）が求められる。ダンベルを受け取って約3秒後、次の「Fuß（アトエ）」の命令で犬を終了基本姿勢に導く。ハンドラーはダンベルを右手に持ち、腕を下にまっすぐ下ろした状態で保持すること。FCI-IGP2においては、課題終了後、ダンベルはハンドラーがスタンドに戻る。

評価基準：

重要要素：

力強くためらいのないジャンプ、持来の実行、ダンベルに向かうおよび戻る動作の一貫した意欲的な様子、ハンドラーの前での密着した正面停座、自信をもって行うプレゼンテーション、早くダンベルを渡す態度。

二次的要素：

課題の開始および終了時の基本姿勢の実施。

誤りの例：

意欲の欠如、力のないまたは不安定なジャンプ、目的意識のない往復、萎縮した動作、自信を欠いた行動、くわえ上げのミス、ダンベルを落とす、遊ぶ／チューイング、ダンベルがハンドラーに当たる、プレゼンテーションのミス、ハンドラーによる補助行為（例：足を開くなど）。

減点の基準：

- ・ 障害に接触：各ジャンプにつき最大1点までの減点
- ・ 障害に足を掛ける：各ジャンプにつき最大2点までの減点
- ・ 課題全体の評価が可能なのは、3つの要素（往路ジャンプ・復路ジャンプ・ダンベル持来）のうち、少なくとも1回のジャンプと持来が実施された場合に限る
- ・ 犬が強い接触で障害を倒した場合、そのジャンプは4点の減点となる。（往路で）倒れた障害を犬がダンベルを持ってジャンプして戻った場合、復路のジャンプは1点の評価（4点の減点）となる。倒れた障害を元に戻して再度行うことはない。

FCI-IGP3 板壁とダンベル持来

この課題では、ダンベル持来が5点、クライミングジャンプ（往復）が5点、計10点で評価される。

板壁の向こう側8mの地点を中心として幅2m×長さ4mの長方形のエリアがマーキングされている。ハンドラーは板壁から最低4m離れた位置で基本姿勢をとり、ダンベルをこの長方形エリアの中に投げる。ダンベルがマーキングされたエリア外に着地した場合は、助手（たとえば試験監督）が審査員の指示により、ダンベルをエリア中央に置き直す（ダンベルは横向き／ハンドラーから見て）。置いた後は作業エリアからすぐに退く。助手がエリア外のダンベルを置き直す際にハンドラーは犬に「座れ」を一度命じることができる。

犬は、ハンドラーの影響を受けることなく落ち着いて座っていなければならない。「Hopp (跳べ)」の命令で、犬はクライミングジャンプをして板壁を越える。そのジャンプ中に「Bring (持ってこい)」の命令を与える。犬は直ちにダンベルへ向かい、すぐに啜えて、往路ジャンプを行いハンドラーの元へ戻らなければならない。この課題全体を通して、犬は意欲的かつ力強いジャンプを見せ、障害に触れることなく持来を完了させなければならない。正面停座およびダンベルの運搬中は、ダンベルを静かに保持し続けること。正面停座後、約3秒の間において、ハンドラーは「Aus (放せ)」の命令でダンベルを受け取る。正面停座では、プレゼンテーション (ダンベル持ってきたよ！という犬の差し出す態度) が求められる。ダンベルを受け取って約3秒後、次の「Fuß (アトエ)」の命令で犬を終了基本姿勢に導く。ハンドラーはダンベルを右手に持ち、腕を下にまっすぐ下ろした状態で保持すること。課題終了後、ダンベルはハンドラーがスタンドに戻す。

評価基準：

重要要素：

力強くためらいのないクライミングジャンプ、持来の実行、ダンベルに向かうおよび戻る動作の一貫した意欲的な様子、ハンドラーの前での密着した正面停座、自信をもって行うプレゼンテーション、快くダンベルを渡す態度。

二次的要素：

課題の開始および終了時の基本姿勢の実施。

誤りの例：

意欲の欠如、力のないまたは不安定なクライミングジャンプ、目的意識のない往復、萎縮した動作、自信を欠いた行動、くわえ上げのミス、ダンベルを落とす、遊ぶ/チューイング、ダンベルがハンドラーに当たる、プレゼンテーションのミス、ハンドラーによる補助行為 (例：足を開くなど)

減点の基準：

- ・ 課題の評価は、3つの要素 (往路ジャンプ・復路ジャンプ・ダンベル持来) のうち、少なくとも1回のジャンプとダンベル持来が実施された場合に限り可能となる。
往路復路のジャンプのいずれか一方が実施されなかった場合、5点の減点となる。

前進と伏せ (Voraussenden mit Hinlegen)

第1パート：開始基本姿勢、助走動作、命令による前進の実行 → 配点の50%

第2パート：審査員の指示後の命令「伏せ」の実行、終了基本姿勢 → 配点の50%

ハンドラーは、10～15歩の助走を行った後、「Voraus (前へ)」の命令とともに片腕を一度だけ掲げて犬を前方に走らせる。ハンドラーはその場で停止する。犬は、指定された方向に向かって、最低30歩の距離を、直線的に速い速度で意欲的に走らなければならない。審査員の指示で、ハンドラーは「Platz (伏せ)」の命令を与える。犬はこの命令を直ちに受け入れて伏せなければならない。ハンドラーは、犬が伏せるまで腕を上げたままにしている

もよい。

犬が命令で伏せなかった場合、ハンドラーは 3 秒以内に 1 回目の追加命令を（審査員の指示なしで）自主的に与える。それでも犬が伏せなかった場合、ハンドラーはさらに 3 秒以内に 2 回目の追加命令を与えることができる。

その後、審査員の指示でハンドラーは犬の元へ向かい、犬の右側に立つ。約 3 秒の間において、審査員の指示により、「Sitz（座れ）」の命令で犬はただちにまっすぐな終了基本姿勢をとらなければならない。

評価基準：

重要要素：

まっすぐで速い前進、そして「伏せ」の命令に対するためらいのない実行。

二次的要素：

課題の開始および終了時の基本姿勢の実施。

誤りの例：

助走時の前への飛び出し、意欲に欠ける前進、横にそれる、ためらうような伏せ、落ち着きのない伏せ姿勢、基本姿勢の誤り、ハンドラーによる補助行為

減点の基準：

- ・ 犬が規定された距離の 50%未満しか前進しなかった場合、または 3 回の命令でも停止できなかった場合、この課題は評価されない（0 点）
- ・ 犬が命令で止まったが伏せなかった：
 - 1 回目の追加命令で伏せた場合：1.5 点の減点
 - 2 回目の追加命令で伏せた場合：2.5 点の減点
 - 2 回目の追加命令でも伏せなかった場合：3.5 点の減点
- ・ 犬が 2 回目の命令でようやく停止して伏せた場合：2.5 点の減点
- ・ 犬が 3 回目の命令でようやく停止して伏せた場合：3.5 点の減点

犬が命令に対して直ちに伏せたものの、審査員がハンドラーに犬の元へ向かうように指示し、ハンドラーが近づく途中で犬が立ち上がって動いた場合、追加命令で再び伏せさせることができる。このとき、犬とハンドラーの距離が 50%未満であることを条件として、最大 5 点までの減点が適用される。

状況下での休止（Ablegen unter Ablenkung）

この課題は、ペアのもう一方の犬が作業している間に実施される。ハンドラーは、審査員から指定された位置で基本姿勢をとり、「Platz（伏せ）」の命令で犬を伏せさせる。

その後、試験の段階に応じて、ハンドラーは審査員の指示で以下の位置に移動する：

- ・ FCI-IGP1：ハンドラーは犬から最低 10m 離れ、犬が見える位置で犬に対して横向きに立つ。
- ・ FCI-IGP2：ハンドラーは犬から最低 20m 離れ、犬が見える位置で犬に背を向けて立つ。
- ・ FCI-IGP3：ハンドラーは犬から最低 30m 離れ、犬から見えない位置に移動する。他の犬が課題を実施している間、犬はハンドラーの影響を一切受けることなく、静かに伏せたままでいなければならない。

ペアの犬が「前進 (Voraussenden)」課題を行う前に、ハンドラーは審査員の指示で犬の元に戻り、犬の右側に立つ。審査員の指示で、「Sitz (座れ)」の命令で犬を座らせて終了基本姿勢をとる。

評価基準：

重要要素：

同じ場所で確実に伏せ続けていること、静かな態度。

二次的要素：

課題の開始および終了時の基本姿勢の実施。

誤りの例：

落ち着きのない様子、ハンドラーによる補助行為、基本姿勢の誤り、早すぎる動作（立つ、座る）、伏せた位置を離れること。

減点の基準：

- ・ 犬が 3m 以上離れてしまった場合、「他の誤りによる減点」に加えて、50%の減点が適用される。

この場合、次の条件を満たしていれば部分的な評価が行われる：

- FCI-IGP1：他の犬が 3 つ目の課題を完了していれば評価可能。
- FCI-IGP2：他の犬が 4 つ目の課題を完了していれば評価可能。
- FCI-IGP3：他の犬が 5 つ目の課題を完了していれば評価可能。
- ・ 犬が迎えに来たハンドラーの方に向かってきた場合：最大 3 点の減点。
- ・ 犬が 3m 以内の範囲を離れた場合や、伏せずに座ったり立ち上がった場合も、最大 50% の減点が適用される。